

聖書の祈りが私の祈りになる（旧約編）

第3章 ヨシユアからサウル王までの時代⑦



サウル王

サウル王

サウルは謎に満ちた人物です。神の目を気にする意識、思慮に欠けた性急さ、祭壇の建設、祈りなどが奇妙な形で混ざり合った人物です。神の目を気にしてはいたものの、敬虔な人物ではありませんでした。時として祈ってはいるものの、祈りの人物とみなすこともできません。彼の不従順で、性急にして愚か、劣悪な行動は、後継者のダビデが取っているような崇高な態度や行動を全く無視している結果であるとも考えられるでしょう。

サウルが神殿を築いて祈っている一例を見てみましょう。これは非常に顕著な例です。

サウルは主のために祭壇を築いた。これは彼が主のために築いた最初の祭壇であった。…それでサウルは神に伺った。「私はペリシテ人を追って下って行くべきでしょうか。あなたは彼らをイスラエルの手に渡してくださるのでしょうか。」しかしその日は何の答えもなかった。（Iサムエル 14:35,37）



サウルが不従順であったがゆえに、サムエルはその王国が彼の家系に沿って継続していくことはないと言いました（Iサムエル 13:14）。するとサウルは、悔い改める代わりに、さらに宗教的な行為に出ました。神から何の指示をいただくこともないままに、兵士たちに夜まで何も食べないという誓いをさせたのです（Iサムエル 14:24）。ヨナタンの勇敢さのゆえに戦いには勝利しましたが、夜が来ると兵士たちは空腹のあまり、律法が要求する血を抜くことなしに、戦利品の家畜を殺して食べ始めました。報告を受けたサウルは、動物を大きな石のところに連れて行かせ、血を抜けるようにしました。そして、最初の祭壇を築きました。おそらくは、律法を破ったことに対する埋め合わせの意図があったのでしょう。しかし、神への捧げものは、受け入れがたいライフスタイルと不従順とを相殺するものとはなりません。

それでも、自らの行いに満足したサウルは、再びペリシテ人に戦いを挑むことを提案します。しかし、サムエルは、まずは主のみこころを求めるよう勧めます。神から「その日は何の答えもなかった」ことで、サウルは、なんらかの罪のゆえに障壁が生まれているのだと結論づけますが、問題が家臣たちではなく自分自身のうちにあるかもしれないということに思いを巡らすことはできません。そこで彼は、誰であれ、原因となっている人物を探し始めます（Iサムエル 14:39）。くじを引くと、ヨナタンに当たりました。彼は、父の誓いを知ら

ないままに、蜂蜜を少し食べてしまっていたのです。これ自体は悪いことではなく、くじもヨナタンが死に値するということを意味するものではありません。単に、彼が何かを食べてしまっていたということを示すだけのものであり、残りの兵士たちを疑惑から解放するものに過ぎませんでした。にもかかわらず、サウルは再び、祈ることなしに、ヨナタンは死ななければならないという性急な誓いをしてしまうのです。幸い、ヨナタンは人々のとりなしによって救われます(Iサムエル 14:44-45)。私たちが自己中心的な行動を正当化し、宗教の外面的な形式を心からの従順の代用物として利用するとき、神はどれほど残念に思われることでしょうか。サウルが神のみこころを求め、それに従っていたなら、神は沈黙を守られることはなかったでしょう。同じ教訓は、今日を生きる人々も学ばなければなりません。

サウルはほとんど、霊的な意味でのジキルとハイドのようなものです。意図的で顕著な不従順な行動に出たと思えば、同じ日の少し後には、自分の礼拝が受け入れられるようにとサムエルに懇願しているのです。事実、彼の本当の狙いは、人々に好印象を与えることにありました。「サウルは言った。『私は罪を犯しました。しかし、どうか今は、私の民の長老とイスラエルとの前で私の面目を立ててください。どうか私とっしょに帰って、あなたの神、主を礼拝させてください。』それで、サムエルはサウルについて帰った。こうしてサウルは主を礼拝した」(Iサムエル 15:30-31)。

このことを、あまりに奇異で、あり得ないことだと考える必要はありません。なぜなら、イエスの時代に悪霊につかれていた人々でさえイエスを礼拝しているからです(マルコ 5:6 を参照)。 そのような礼拝は、決して受け入れられることはなく、不従順を埋め合わせるものにもならないのです。

サウルも祈りはしました。しかし、神の応答はいつも同じでした。「それで、サウルは主に伺ったが、主が夢によっても、ウリムによっても、預言者によっても答えてくださらなかった」(Iサムエル 28:6)とある通りです。神がなぜサウロに応答しなかったのか、私たちは怪訝に思うかもしれません。なぜなら、聖書自体が、ある箇所で、神が「サウルの心を変えて新しくされた」(Iサムエル 10:9)と語っているからです。私たちは、実際の心臓移植では、体が新しい心臓を拒絶することが稀ではないことを知っています。おそらく、サウロも、新しい心(heart)を与えられていながら、自分自身の悪意(hurt)を選択する力を持ち続けていたのでしょう。神に対する反逆と不従順のゆえに、彼には悔い改めと回復の余地が存在しなかったのです。なんと恐ろしい情景でしょうか。

結果として、サウルは回答を得ることができませんでした。彼は、神に拒まれた後も30年近くにわたりイスラエルの王として留まりましたが、神からは切り離されてしまいました。いかなる手段も企ても役には立たず、いかなる夢もウリムも預言者も役に立つことはありませんでした。天は沈黙したままでした。最終的な解決として、彼は霊媒のもとに走ります(Iサムエル 28:7)。そこで答えを得はしたものの、自らの問題に対する解決は何も得られず、最終的には悲惨な形で自らの命を絶つことになりました。彼は、放縦な民を導く放縦な王として、人々を敗北へと導くことになったのです。モーセやデボラ、ハンナやサムエルなど、彼の前を歩んだ人々には敬虔な祈りの人々がいました。なんと違うのでしょうか。



質問

- 1 サウルはどんな要素が混ざり合った「謎に満ちた人物」ですか？ あなたはサウルについてどんな印象を持っていますか？
- 2 サウルは、自分が悔い改める代わりにどんな宗教的な行為に出ましたか？ あなたも、悔い改めと従順の代わりに、宗教的で信仰的と思われる形式をとったことがありますか？
- 3 どのような行動や態度のために、サウルは「ジキルとハイド」と言われていますか？
あなたとサウルに共通するところはありませんか？ サウルを「反面教師」として何を学ぶことができますか？
- 4 サウルも祈りました。でも神は応答されませんでした。それはなぜだと思いますか？ あなたは、自分の祈りに応答がなかった原因に気付いたことがありますか？ 神から応答をいただくためには何が大切だと思いますか？
- 5 今日読んだ箇所から、あなたは祈りについてどんなことを教えられましたか？
どんなことを実践したいと思いますか？



祈り

主なる神さま。私が変わることなくいつもあなたの声を聞き、あなたに従うことができますように。失望して祈ることをやめることがないように助けて下さい。

学びのための問い

1. ギデオンの例にならって何らかの「羊の毛」を並べることが適切なのは、どんな状況でしょうか。
2. ヤベツの祈りの中で、あなたが置かれている状況に当てはまるのはどれでしょうか。
3. イスラエルの人々がご自分により頼む者となるようにするために、神はどんな方法で彼らをお取り扱いになったでしょうか。
4. 祈りの中で、切迫した願いを表現すべく用いられる方法としては、どんなものがあるでしょうか。
5. 人々が王を求めてきたとき、サムエルは、彼らに対する継続的な心配をどのようにして示したでしょうか。また、それはどういう理由からだったでしょうか。
6. 神がある人の祈りに答えるのを拒絶なさるとき、そこにはどんな理由があるでしょうか。